

国指定史跡 新府城跡を探る

山下孝司

1 はじめに

武田勝頼と新府築城の評価

(1) 家臣の意見などに惑わされて突然に新しい城を築き、その結果武田氏は滅亡した。

『甲陽軍鑑』・『甲州嘶』・『裏見寒話』・『甲陽随筆』・『並山日記』

(2) 新府城の建設は、武田信玄によって計画され、勝頼に至り実行された。

『兜岩雜記』

(3) 武田氏滅亡の最大要因の一つ

「単純に防衛上の守りのみを目的とした城と思われ、その防御体制も整わないままの状態です。自火に掛けられている。もちろん領国体制そのものは、勝頼の最後の状況が象徴しているように、すでに築城以前に崩壊していたと思われる。その状況を認知できないまま、あえて領内負担となる新府築城を強行したことは恐怖心かあせり以外の何ものでもなかったと思われる。」(柴辻俊六「新府築城と武田勝頼」網野善彦監修『新府城と武田勝頼』新人物往来社 2001年)

(4) 守りのための軍事的防衛上の城

「この城は、天正三年(一五七五)の長篠の戦い以降劣勢となった武田勝頼が、織田・徳川連合軍の甲斐侵攻に備え、天正九年に築いて府中を移したものである。富士川に面した台地の上への築城は極めて軍事的色彩が強く、政治・経済・文化の中心としての都市づくりとは、根本的に異なるものであった。」(数野雅彦「甲斐における守護所の変遷」金子拓男・前川要編『守護所から戦国城下へ—地方政治都市論の試み—』名著出版 1994年)

(5) 新府中建設は戦国大名武田氏の優れた選択

新府城の築城は、勝頼が武田領国全体の経営を考えて、その中心となる政庁・首都の移転を行ったもので、それは戦国から近世への移行期においてあるべき姿であった。戦国大名武田氏の甲斐国統治には甲府の躑躅ヶ崎館で事足りたのであるが、六カ国を領有する大大名武田氏の拠点としては相応しいものではなく、新府城は領国経営の中核として理にかなったものであった。(笹本正治「武田勝頼と新府城」シンポジウム『戦国の浪漫新府城 ふるさとの城を語ろう』発表要旨 韮崎市教育委員会ほか 1999年)

戦国大名武田氏最後の居城で、武田氏の築城技術の集大成であった新府城。新府とは何か、新府城跡にみる武田氏の築城技術とは。発掘調査成果や諸資料を通じて見えてきた新府城の実像に迫ってみたい。

2 新府城の歴史

(1) 新府築城

天正9年(1581)2月15日着工。同年9月頃完成。

〔史料I〕 真田昌幸書状(「長国寺殿御事蹟稿」巻三所収文書 真田宝物館所蔵)

出浦右近助昌相伝

縦書

就示 上意令啓候、仍新御館被移御居候之条、御分国中之以人夫、御一普請可被成置候、依之、近習之方二候跡部十郎左衛門方、其表為人夫御改被指遣候、御条目之趣有御得心、来月十五日二御領中之人々も着府候様二可被仰付候、何も自家十間人足老人宛被召寄候、軍役衆二者、人足之糧米ヲ被申付候、水役之人足可被差立候由上意候、御普請日数三十日候、委曲跡十可被申候、恐々謹言、

真安

(天正九年)正月廿二日

昌幸御花押

(この文書を記録した部分の標題には「甲州新府中造営」と記されている。)

〔史料Ⅱ〕 梶原政景書状写（天正9年10月18日付岡本兵右衛門尉頼元宛て「諸州古文書」内閣文庫所蔵）

追而甲府二者、号菲崎地被築新城、去月普請悉出来候、当冬至干三州表二打出、当方出勢被相尋、可被及調談分二候、猶追々可申入候、路次及候間、一帯二申候、以上、

(2) 新府入城

天正9年12月24日新府入城。

〔史料Ⅲ〕 「理慶尼記」（大善寺所蔵）

御台所の、館へ御うつりのときは、金銀、珠玉を、鑲めたる、輿車、あたりもかゞやくばかりにて、御供の衆、かずしらず、古府より新府のその間、三百よてうと、申せしを、よひつる、さしつる、うつらせたもふ。比は十二月廿四日なりしに、

(3) 新府落城

天正10年3月3日新府城自焼・没落。

〔史料Ⅳ〕 『信長公記』（卷十五） 天正10年（1582）の項

三月三日卯刻、新府の館に火を懸け、世上の人質餘多これあり、焼籠にして罷り退かる。人質腫と泣き悲しむ声、天にも響ばかりにて、哀れなる有様、申すは中々愚かなり。

3 新府城の位置と構造

新府城は、八ヶ岳南麓から甲府盆地に向って南東方向に楔形に延びた七里岩台地上の、南西端に立地し、標高約52.4mの「西の森」と呼ばれた小山に築かれる。城の西側は釜無川が流れ、川によって浸食された比高12.9mの断崖となっており自然の要害をなす。山頂部分は東西90m南北150mの規模の本丸で、その西側には54m四方の広さの二の丸がある。本丸の南側に位置する三の丸は、北側の東西130m、南側の東西70m、南北100mの台形を呈し、中央の土塁によって東三の丸と西三の丸に分けられる。北西端には乾門（従来の搦手）のある独立した郭、南端には櫓形・丸馬出・三日月堀といった南門（従来の大手）の虎口施設がつくられ、山裾の北から東にかけて堀と土塁によって防御された帯郭がめぐる。ほぼ全山にわたって諸々の施設がみられるが、城は基本的に土の切り盛りによる造成によって構築されている。

4 新府城跡発掘調査と武田氏の築城技術

(1) 新府城跡乾門の発掘調査と武田氏築城の櫓形虎口

① 新府城跡の櫓形虎口

○乾門（従来の搦手）の櫓形虎口

城の北西隅に位置する乾門は、東側の水堀と西側の七里岩の崖とに挟まれた土橋を通じる構造で、内側が大きく外側が小さい土塁によって囲まれたやや変則的な形の櫓形虎口である。櫓形の内部空間は東西葉13m、南北約12mの広さがあり、一の門（外側門）は北西角、二の門（内側門）は南東隅寄りに設けられている。

一の門の調査では、直径35cm前後の円形の柱穴が南と北の2箇所を検出された。門の幅は約1.55mの間隔（柱穴の中心で測る柱の間隔は約1.9m）であった。

二の門の調査では、方形に配された6個の礎石が確認された。

(イ) 6個の礎石を3個ずつ平行に並べ、間を平石でつないだ形態。

(ロ) 礎石の中心での間隔2.5m×2.8mと間口に対して奥行きが長い。

(ハ) 礎石の大きさは一辺40～60cm、外側から大・小・中の大きさで並べられている。

このほか、礎石と土塁基底部の間には石積が施されていたが崩れた状態であり、礎石に伴って散在した状態で焼土や炭化材、角釘が出土した。

② 武田氏館跡（躰躰ヶ崎館跡 山梨県甲府市）の櫓形虎口

○西曲輪北側の櫓形虎口 天文20年～21年（1551～1552）の西曲輪の増設された時期第1期 虎口の門は外側（1号門）と内側（2号門）が直線的に並ぶ。

第2期 内側の門を西にずらした食違いにした虎口。

(イ)6個の礎石を3個ずつ平行に並べ、間を平石でつないだ形態。

(ロ)間口3.2m、奥行き3.7mで間口に対して奥行きが長い。

(ハ)礎石の大きさは一辺46~65cmと大きさが異なり、櫛形内部側が一番大きい。

第3期 内側門の土塁基底から石積みを施したつくり。(武田氏滅亡後に改修)

③ 牧之島城跡(長野県信州新町)の櫛形虎口

○北側櫛形虎口

(イ)6個の礎石を3個ずつ平行に並べた形態。

(ロ)間口3m、奥行き3.5mで間口に対して奥行きが長い。

(ハ)礎石の大きさは長さ60cm~1mで、中央のものが小さく前後が大きい。

④ 櫛形虎口の特徴

I 櫛形虎口前面が低土塁あるいは築地塀で、奥側は大きく高い土塁となり、櫛形に向かって前面虎口の一の門を左側、奥の虎口の二の門を右側に寄せた形態。

II 二の門となる虎口は間口に対して奥行きの長い礎石配置を施す。

III 礎石6個を使用する門 ⇒ 妻入り形式

四脚門とは異なる門 武田氏に特徴的な門形式か?

(2) 城郭跡虎口の礎石配置と門形式

① 箕輪城跡(群馬県高崎市)の虎口

御前曲輪西虎口 正方形の礎石配置、中央の礎石に門扉が付く四脚門

間口3.1m奥行き3.1m

② 太田金山城跡(群馬県太田市)の虎口

大手虎口 間口に対して奥行きの長い形態の礎石配置

第1段階 間口2.8m奥行き3.6m、第2段階 間口2.7m奥行き3.4m、

第3段階 間口2.7m奥行き3.8m

③ 長峰城跡(茨城県龍ヶ崎)の虎口

第1号虎口 間口に対して奥行きの長い礎石(大・小・中)配置

間口2.62m奥行き3.12m

④ 上ノ平城跡(長野県箕輪町)の虎口

主郭西側中央で虎口 間口に対して奥行きの長い礎石(大・小・中)配置

間口2.2m、奥行き2.7m

⑤ 『越後国郡絵図』にみる門

「瀬波郡絵図」(慶長2年(1597)ころ作成)

「平林城」 草屋根白壁塗りの塀に挟まれた二階建て妻入りの楼門。

「村上ようがい」 山頂の平入りの棟門と、山腹の郭の虎口部分に妻入りの建物。

⑥ 新府城跡乾門櫛形虎口との比較

乾門二の門は間口に対して奥行きの長い形態の門建築が推定され、それは武田氏城館の櫛形虎口に共通し、ある一定の規格によってつくられていたと思われる。しかし、太田金山城跡や長峰城跡などの事例からすると、このような礎石配置による建物・門は、城郭遺構として存在しており、武田氏独自の独創的な門ではなく、城館建築の様式のひとつを採用して櫛形虎口に用いたことが考えられる。

5 新府の景観

新府という名称は新たにつくった府中ということであり、築城に関する評価は色々あるが、勝頼は甲斐国ひいては武田領国の政治の中心となる首都の建設を目指したことは想像に難くない。しかし、新府城は入城からわずか3ヶ月足らずで廃城となってしまい、新府中の実態に迫るにはかなり難しい。『甲州嚙』『甲陽随筆』など近世の地誌類を瞥見すると、新府城周辺に家臣屋敷があったことを伝えており、近世の絵図などにも屋敷地を描いたものが見受けられ、『甲斐国志』は新府の北に位置する穴山を外郭の内とし能見城をめぐる旧

壘などを紹介している。これらによれば穴山から南側の七里岩台地上に新府中が建設（計画）されたものと推測され、新府城のある所で東西約 1.2 km、能見城から七里岩台地南端まで南北約 5.4 km の広さがある。

ちなみに戦国城下町甲府は、相川扇状地の開析部に造営された 2 町（218m）四方の躑躅ヶ崎館（武田氏館）の中心線を機軸に、ほぼ 2 町間隔に設けられた 5 本の南北基幹街路と、これに直交する東西街路とが格子状に結ばれ、扇端部にかけて城下町域が広がっており、周辺を含めると「①躑躅ヶ崎館を核として城下町北半に広がる家臣屋敷地、②城下町南半に整備された商職人町、③城下町南端の東西出入口部に開設された市場地区、④愛宕山を隔てた北原扇状地に信濃から移転された善光寺門前町、⑤甲府開創以前に一条小山南麓に成立していた一蓮寺門前町、⑥城砦群が取り巻く外縁地区」から構成されていた（数野雅彦「躑躅ヶ崎館と甲府城下町」『山梨県史』通史編 2 中世）。相川扇状地上の城下町域は、およそ東西 1.2 km 南北 3 km の広さがある。なお、躑躅ヶ崎館（武田氏館）は天文 12 年（1543）の火災以降、天文 21 年～22 年（1551～1552）の西曲輪建設の頃に、室町幕府の將軍邸を模倣した方形館に改修され、この天文年間に基幹街路の整備も進められたとみられている（数野雅彦「本拠を築く」『定本武田信玄』、同 前掲）。將軍邸と同形態の館をつくることによって室町幕府との関係を示して地域の政治的権威の象徴とし（小島道裕「花の御所と室町期の館」『天下統一と城』）、碁盤目状の京都風町並みに整備することで戦国城下町甲府は形成発展したといえよう。

新府城は、文献やその郭配置などから、守護館に基礎をおいた躑躅ヶ崎館の延長線上に位置づけられた「館づくり」の城と、捉えられている。しかし、甲府が東、西、北の三方を山で囲まれた相川扇状地の北辺開析部に居館（躑躅ヶ崎館）を据えて、そこから南側扇端部分にかけて城下町が建設されたのとは比べ、新府は東と西を塩川と釜無川、南側を両河川による侵食によってつくられた七里岩台地上に占地し、新府城は穴山と台地南端の間の中央から北寄りの西端に位置しており、その景観からは同じ府中とは言っても、異なった都市計画（町づくり構想）による城下町であったことがうかがえる。

6 おわりに

- (1) 武田氏築城技術の集大成
榊形虎口・丸馬出・三日月堀
- (2) 館づくりと「館」の意識
- (3) 新府とは

〔史料Ⅴ〕 『高白齋記』永正 16 年（1519）8 月条
同月十五日新府中御歟立テ葉初ム。同十六日信虎公御見分。同十二月廿日庚辰信虎公府中江御屋移リ。

〔史料Ⅵ〕 『高白齋記』永正 17 年（1520）3 月条
三月十八日三沢ノ宗香於甲府万部ノ經初ル。

〔史料Ⅶ〕 『妙法寺記』永正 16 年（1519）条
甲州府中ニ一國大人様ヲ集リ居結レ。上様モ極月移リ御坐シテ御台様モ極月御移。

〔史料Ⅷ〕 「南松院文書」（『甲斐国志』巻之百二十一 附録之三）
且本州ノ太守勝頼公、在其位已十歳、常用讒人乱、不聴親族諫、去歳秋之孟、壞古府欲築新府、古府已破、新府未成、今茲春之季、敵軍雲起遍四辺、嗚呼天乎命乎、一族士卒不動干戈、一時離散、守亦出奔、